

東アジア諸語の発想と表現

——「スル」的言語と「ナル」的言語をめぐる——

禹 吳 穎

論文要旨

本稿は、異なる言語の間に見られる〈相対性〉(relativity)を問題にしており、即ち、同じ事態であってもそれを言語化する際、言語によって差があり得るという認識に立って、異言語間の表現構造を比較したものである。異言語間の表現構造の比較は、主にその異同が顕著な言語において盛んに行なわれてきた。その中でも、池上(1983)は日英語の表現構造を比較対照し、日本語は〈出来事全体〉を捉え、事態の〈成り行き〉という観点から表現しようとする「ナル」的言語であるが、英語は事態に関与する主体や行為を際立たせるような形で表現しようとする「スル」的言語であると述べている。本稿では、池上の「スル」と「ナル」の議論を出発点とし、外部世界に対する捉え方において共通の基盤が存在するともいわれる日本語・韓国語・中国語を対象とし、各言語の位置付けを行う。

キーワード【「スル」的言語・「ナル」的言語、好まれる言い回し、東アジア諸語、事象の段階、表現構造】

0. はじめに

我々は単に母語の世界の中で生きていると、それぞれの場面をことばで表す際に習慣づけられている言い方が〈自然な言い方〉であるという暗黙の思い込みを抱き、また、そのようになっている自分に気付かずに過ごしてゆくだろう(池上(2011))。これを、池上(2011:14)では〈母語絶対性の神話〉と呼んでいるが、外国語との出会いにより、しばしばこの〈神話〉が揺さぶられることがある。例えば、同じ事態について言及する際(下線は引用者)、

- (1) a. 彼は交通事故で死んだ。 (池上, 2006:21)
b. He was killed in the traffic accident.

のように、日本語は自動詞を用いて表現するが、英語は他動詞‘kill’の受動態(直訳:殺サレル)を用いて表現する。また、ごく単純素朴に「行く」は‘go’であり、「来る」は‘come’であると思っ

- (2) a. 今、行きます。
b. I'm coming.

(2) は、その表現が表そうとしている事態は同じではあるが、簡単にまとめるならば、日本語は〈出発点〉に視点を据えた表現であり、英語は〈終着点〉に視点を据えた表現であるという相違が見て取れる¹⁾。

以上のことから、事態をことばで切り取って言語化する際に、どの側面により焦点を当てるかという点で、日本語と英語の話者にはスタンスの相違があるということがいえる。但し、この場合、選択可能な幅は無限大ではなく、有限に存在するいくつかの選択肢の中から選ばれるであろう²⁾。

このような異言語間の表現構造の比較対照は、主にその異同の顕著な言語において盛んに行なわれた。例えば、日本語と英語の場合は、「スル」的言語と「ナル」的言語(池上(1983)、寺村(1976))³⁾、人間中心と状況中心(國廣(1974a, 1974b))、人間の全体と一部、所有表現と存在表現(國廣(1974b))など、様々な表現構造の差異が指摘されてきた⁴⁾。以下、順にそれぞれの例を一つずつ抜粋し示す(下線は原文のまま)。

- (3) a. First prize went to John. / 一等賞ハ太郎ノモノトナッタ。 (池上, 1983 : 281)
 b. I heard shouting. / 叫び声がしたぞ。 (國廣, 1974b : 48)
 c. *He's broken a bone.* / 骨が1本折れている。 (國廣, 1974b : 48)
 d. Listen, I *have* something to tell you. / あのね、ちょっときみに話があるんだが。 (國廣, 1974b : 50)

これらの研究は、異言語間の構造を対照するという域を越え、具体的な〈言語場〉⁵⁾に密着し、話者の〈心的作用〉に立ち入るところにまで取り組んでいると言える。しかし、東アジア諸語の言語間における表現構造を比較対照した研究は、管見の限り未だ少ない。例えば、日本語・韓国語・中国語の3言語は、外部世界に対する捉え方においても共通の基盤が存在すると言われており⁶⁾、(1a)と(2a)の日本語(「J」と記す)に対応する韓国語(「K」と記す)と中国語(「C」と記す)を見ると⁷⁾、

- (4) J 彼は交通事故で死んだ。 ((1a) 再掲)
 K 그는 교통사고로 죽었다.
 ku-nun kyotongsako-lo cwuk-ess-ta
 He-TOP traffic accident-INST die-PAS-DEC
 C 他死于交通事故。
 tā sǐ yú jiāotōngshìgù
 He die by traffic accident

(5) J 今、行きます。 (2a) 再掲)

K 지금 갑니다.

cikum ka-pni-ta

now go-HNR-DEC

C (我) 马上就过去。

wǒ mǎshàng jiù guòqù

I right now go

のように、一見際立った対立はないように見える。だが、さらにその奥にもう一歩立ち入ってみると、様々な異同が存在する。本稿では、日韓中の3言語の表現構造に重点を置き、〈「スル」的言語〉(DO-language)と〈「ナル」的言語〉(BECOME-language)の議論をその出発点とし、各言語の事態の捉え方の特徴を明らかにすることを目的とする。具体的には、池上(1983, 2008a, 2011)の成果を踏まえ、具体例を通して検討し、各言語の位置づけを行うこととする。

1. 理論的背景

具体的な分析に立入る前に、その前提として、異言語の話者の間に見られる「好まれる言い回し」とはどのように定義されているのか、言語間の表現構造を比較するとは、どのレベルで行なわれるのか、また、発想と表現の定義について、若干触れておくことにする。

1.1 「好まれる言い回し」とは

我々がある〈事態〉をことばで切り取って言語化しようとする際、その〈事態〉に含まれる全てを言語化することは不可能であるし、その全てを言語化する必要もない。また、言語化されることは、おそらく〈事態〉の中で自らと関わりのある部分だけで十分であり、その判断は話者自身の〈主體的〉な判断で行なわれるであろう(池上(2009))。しかし、同じ〈事態〉であっても表現形式が異なれば、同じ〈事態〉をどのように捉え、どのような「言い回し」で言語化するかは必ずしも一致するとは限らず、言語間で差があり得るのではなかろうか⁸⁾。このような言語間の差は、以下に引用するように、かつて Whorf (1956) が ‘fashions of speaking’ という用語で考えていたこととも相通じるところがあると考えられる。池上訳(1993)では、それを「好まれる言い回し」と呼んでいる(下線は引用者)。

... there is a relation between a language and the rest of the culture of the society which uses it. There are cases where the “fashions of speaking” are closely integrated with the whole general culture, whether or not this be universally true, and there are connections within this integration, between the kind of linguistic analyses employed and various

behavioral reactions and also the shapes taken by various cultural developments.

(Whorf, 1956: 159)

ある言語とその言語を使っている社会の他の文化の面との間にはある関係は存在する。例えば、普遍的に妥当するかどうかは別にしても、場合によっては「好まれる言い廻し」⁹⁾ というものがある、それが文化全般と密接に統合されていることがあり、この統合体の中では、どのような言語的な分析が行なわれているかということと反応として現れるさまざまな行動、そしてまた、さまざまな文化的発達との間には関係があるのである。

(池上訳, 1993 : 139)

上記の「好まれる言い回し」という概念について、池上 (2009 : 23) では「ある特定の言語の話者がその言語での表現を意図してある事態と認知的に関わる際、どのように振舞うかという点で、ある特徴的な傾向がありうるということを示すもの」と定義づけられている。また、この「好まれる」について、本多 (2013:61) は「この場合の「好まれる (preferred)」は、「(私たちは) この言い方が好き」と自覚的に感じていることではありません。なにも自覚せずにふつうにぱっと言う、ということです」と述べている。本稿では、池上 (1993) に倣って「好まれる言い回し」という用語を用いるが、本多 (2013) の定義に従い考察を進めることにする。

1.2 〈相対的〉な傾向

本稿で行われる言語間の表現構造の比較は、どの程度のレベルで行われるのであろうか。日英語の表現構造における特長について、池上 (1983 : 280) には次のような記述がある (下線は引用者)。

英語では〈場所の変化〉の動詞が〈状態の変化〉に転用される (つまり、個体中心的な捉え方が本来そうでない分野にまで拡大される) 傾向があるのに対し、日本語では本来の〈状態の変化〉の動詞が〈場所の変化〉に転用される (つまり、出来事中心的な捉え方が拡大される) 傾向がある… (中略) …日本語と英語の〈運動〉と〈行為〉を表わす動詞に関して、やはりこの対照的な傾向に基くと思われる微妙な意味の差が存在する…

上記の引用文に見られる「傾向」とは、どういう含みがあることばであらうか。それは、おそらく「スル」と「ナル」という言語話者の振る舞い方の類型は、異言語間の表現構造に見られる相違が〈絶対的〉な傾向を意味するのではなく、〈相対的〉にそのような傾向の含みがあるということの意味していると考えられる。即ち、日本語と英語を比べると、同じ事態を表

す時に、日本語の方が英語に比べて「ナル」的表現を好み、また英語の方が日本語に比べて「スル」的表現を好むということである。以下では、異なる言語における話者の振る舞い方の〈相対的〉な相違というレベルで比較対照を進めることにする。

1.3 発想と表現

池上 (2011 : 17) は、言語について次のように述べている (強調は引用者)。

〈言語〉は〈自然〉的な対象では決してない。人間によって生み出され、人間によって使われる〈文化〉的な対象である。

このような立場から言語を考えると、人間を排除し言語だけに眼を向けるのではなく、それと関わりのある人間にも注意を注ぐ必要があろう。ならば、言語と関わる人間の役割とは、どのように考えれば良いのであろうか。それは、一般に〈話者〉(speaker) という概念で総括されており、その話者がすることはおおまかに言えば、事態を自分との関連でどのように意味づけるか、即ち、発話の時点において、事態に含まれる内容の中で、自らにとって関わりのある内容だけを選択し表現することであろう (池上 (2000))。

このような話者の役割について、池上 (2009) は〈認知の主体〉と〈発話の主体〉とに分けて説明している。まず、前者は「自らが〈事態〉のうちから言語化の対象として選択した部分について、それをどのような〈視点〉で捉えるかを自らとの関わりに応じて判断し、〈主体的〉に選択」(p. 6) するまでのプロセスを指す。次に、後者は「この〈主体的〉に選択された〈事態把握〉の仕方と内容を担うにふさわしい表現の形式を選択し、それによって言語化して発話」(p. 6) することを指す。対照言語学における発想と表現の定義については、研究者によって様々な角度から捉えられており¹⁰⁾、どのような捉え方が一般的であるかは言えない現状ではあるが、本稿では、池上のいう〈認知の主体〉の域を「発想」と捉え、〈発話の主体〉の域を「表現」と捉えることにする。

2. 言語間の表現構造をめぐる諸説

本節では、先ず、英語と日本語の対立的な表現構造を対比させ、それぞれを「スル」的言語と「ナル」的言語に分類した池上 (1983, 2008a, 2011) の研究について概観する。次に、韓国語と日本語をそれぞれ「スル」的言語と「ナル」的言語とに位置づけた金 (1999) の論文を概観し、それに潜在する問題について若干の考察を行うという順に進める。

2.1 池上の「スル」的言語と「ナル」的言語

日本人が「スル」より「ナル」を好むということはしばしば指摘されてきた¹¹⁾。言語の面に

における「スル」的と「ナル」的とは、大雑把に言えば、「主体（動作主）に主眼を置き、それを際立たせるような形で表現しようとする傾向」と「主体（動作主）を事態の内部に位置づけ、自然な推移として事態を捉えて表現しようとする傾向」との対立であろう。

池上(1983)は、英語は「スル」的言語であり、日本語は「ナル」的言語であると述べている。具体的には〈場所の変化〉と〈状態の変化〉の対称的な傾向から「〈個体への注目〉と〈全体的状況への注目〉」、「〈もの〉と〈こと〉」の対立と関連付けて説明しており、それについて簡単に触れておく。英語と日本語の動詞に関して（下線は引用者）、

- (6) a. John went crazy. (池上, 1983 : 250)
b. The well ran dry.

- (7) a. お殿様ノオ成リ (池上, 1983 : 252)
b. 関山ヲモウチ越テ、大津ノ浦ニナリニケリ。

のように、英語では運動(=〈場所の変化〉)の動詞を〈状態の変化〉の動詞として、日本語では〈状態の変化〉の動詞が〈場所の変化〉の動詞として、互いに逆方向への転用が見られると述べている。すなわち、英語では〈場所の変化〉が、日本語では〈状態の変化〉が「拡大の中心」(center of expansion)となっているのである。

また、〈場所の変化〉において、〈変化するもの〉の「個体としての独立性が明確であれば、われわれの注意はその個体そのものの(場所の)変化という方向」(p. 254)へ向けられるが(「個体への注目」)、「個体としての独立性が失われれば、それは全体の中に埋没し、われわれの注意は全体像における(状態の)変化という方向」(p. 254)へ向けられる(「全体的状況への注目」)。すなわち、「〈場所の変化〉という範疇は変化する個体への注目ということを通じて〈する〉的な考え方と、一方〈状態の変化〉という範疇は変化全体への注目ということを通じて〈なる〉的な捉え方とそれぞれ相通じるものがある」(p. 281)と指摘している。

このような「ナル」的表現について、池上(2008a : 92)は（下線、強調は引用者）、

〈ナル的〉な表現は実は〈人間排他的〉な構文ではなく、高度の〈自己中心的〉な構図での表現なのである。ただ、見る主体としての自己にとっては、自己自体は見られる客体とにならないから言語化されないということである。[...] その原点は日本語話者好みの事態把握のスタンスとしての〈主観的把握〉にあるという認識を持つことが欠かせない [...]

と述べ、「ナル」的と「スル」的という対立的な特徴は「〈主観的把握〉と〈客観的把握〉の一侧

面に他ならない」(p. 92)と指摘している。しかし、これは裏を返せば、〈主観的把握〉と〈客観的把握〉によって言語の「スル」的と「ナル」的な側面をも捉えられることを示唆しているようにも思われる。その二つの概念については、池上(2011)に詳しく述べられている。

池上(2011)では、〈事態把握〉(construal)を、「〈話者〉(主体)が発話に先立って言語化の対象とする〈事態〉(客体)に課す認知的な処理の営み」(pp. 27-28)であると述べ、さらに〈主客合一〉(subject-object merger: 〈主体〉が〈客体〉の中に入り込むという形で両者が融合している状況)の構図をとる場合を〈主観的把握〉(subjective construal)、〈主客対立〉(subject-object contrast: 〈主体〉と〈客体〉はお互いから離れて存在するという形で相対し合っている状況)の構図をとる場合を〈客観的把握〉(objective construal)と呼び、この二つの類型に区別している。この二つの概念について(下線は引用者)、

〈主観的把握〉: 話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の直接の当事者として体験的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。

〈客観的把握〉: 話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は(自分の分身をその事態の中に残したまま)自らはその事態から抜け出し、事態の外に身をおいて、傍観者ないし観察者として客観的に(自己を含む)事態を把握する。
(池上, 2011: 28-20)

と、さらに詳細な説明が述べられており、このような議論に基づいて考察すると、日本語話者は〈主観的把握〉に、英語話者は〈客観的把握〉に傾くと指摘している。以下に、その具体例を一つ抜粋し示す(池上(2011: 29)による)。

- (8) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。 (川端康成『雪国』)
b. The train came out of the long tunnel into the snow country.
(E. Seidensticker (1957) 訳: 汽車は長いトンネルから出て雪国へ入ってきた。)

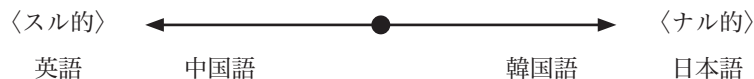
(8a) は「〈主人公〉(主体)が問題の〈事態〉(客体)に臨場するという〈主客合一〉の構図」(p. 30)であり、(8b) は「翻訳者は問題の〈事態〉の外に身を置き、〈主人公〉を乗せた汽車がトンネルから出てくるのを離れたところから眺めて言語化するという〈主客対立〉の構図」(p. 30)であると説明している。さらに、韓国語と中国語についても触れている(下線は引用者)。

信頼できる中国語話者に意見を求めると、冒頭の文であることもあって〈汽車〉を言語化しない訳では落ち着きが悪いということのようである。韓国語訳も複数存在するが、〈汽車〉を言語化しない訳に対する違和感は中国語話者の場合ほどではないという印象を受ける。(ちなみに他の点も含めて、一般的に、中国語は相当英語寄り、韓国語は日本語寄りの言語という印象を受ける) (池上, 2011: 31-32)

中国語話者は〈事態把握〉のスタンスからいうと、はっきりと英語話者に近い客観的なスタンスをとる。日本語話者のように容易に〈自己投入〉をしないのである。

(池上, 2011: 38)

上記のように、池上(2011)では日韓中の3言語についての重要な示唆が与えられており、その具体例を求めてみたいところではあるが、本文中には挙げられていない。以上の指摘を踏まえて考えてみると、次のような図にまとめられるであろう¹²⁾。



〈図. 1〉各言語の位置づけ

2.2 金(1999)の「ナル」的表現と「スル」的表現

金(1999)は、「ナル的表現」とは「動作主にはあまり関心を持たず、事柄が起った結果やその結果生じた状態に視点を置いて表現すること」(p. 62)であり、「スル的表現」とは「その動作主を中心にして事柄を能動的・主体的に把握し、その動作の進行過程に視点を置いて表現すること」(p. 62)であると定義し、それに基づいて「受動・能動表現」と「自・他動詞表現」との二つの観点に限定し考察を行っている。その帰結によると、日本語と韓国語はそれぞれ「ナル的表現」と「スル的表現」とに位置づけられる。以下にその代表的な例文を少し取り上げ、順に検討する。

まず、「受動・能動表現」については(次の文の‘*’と‘?’は、文の不適格性を示す。なお、文の適格性の判断は、金(1999)による)、

- (9) a. 私は赤ちゃんに泣かれた。 (金, 1999: 10)

b.? 나는 아이에게 우는 것을 당했다.

na-nun ai-eykey wunun kes-ul tanghay-ss-ta¹³⁾

I-TOP child-DAT cry FN-ACC PASS-PAS-DEC

私は子どもに泣くのをされた。

- c. 나는 아이가 울어서 아주 힘들었다.

na-nun ai-ka wulese acwu himtul-ess-ta
I-TOP child-NOM cry very painful-PAS-DEC
私は子どもが泣いてとても大変だった。

のように (9a) の日本語は「動作の表わす動作主を直接前面に立てず、その影響を受けた受け手を主語に立てた受動表現で把握している」(p. 11) のに対し、(9c) の韓国語は「行為や動作の主体者を主語に立てた能動表現で表わし、その被害意識はマイナス評価を伴う表現を付して表わされている」(p. 11) と説明している。

次に、「自・他動詞の表現」については、次の (10) と (11) の用例を取り上げ (下線は引用者)、

- (10) a. 映画、もう始まったよ。 (金, 1999 : 10)

- b. 영화 벌써 시작됐어.

yenghwa pelsse sicak-toy-ess-e
movie already begin-PASS-PAS-FIP

- (11) a.* 映画、もう始めたよ。 (金, 1999 : 29)

- 영화 벌써 시작했어.

yenghwa pelsse sicakhay-ss-e
movie already begin-PAS-FIP

韓国語は自動詞と他動詞の両方が可能であるのに対し、日本語は自動詞表現のみが可能であるということから、金 (1999) は「日本語の自動詞表現好みの一端が窺える」(p. 29) と指摘している。自動詞表現は「動作・作用の影響を受ける対象が主格で表されることによって、結果中心の表現が成立する」(pp. 62-63) が、他動詞表現は「動作主が主格で表されることによって継続・過程の意味が表れ、動作主中心の表現が成立する」(p. 63) と述べ、短時間・瞬間的に行なわれる事柄、或いは、動作主の関与度が低く、無意識的に行なわれる事柄の場合、日本語は自動詞表現を、韓国語は他動詞表現を用いると指摘している。

このように日本語と韓国語は「自動詞表現と受動表現」と「他動詞表現と能動表現」との対立をなしており、それぞれ「ナル」的言語と「スル」的言語とに位置づけられると述べている。

3. 問題の所在

金 (1999) は日本語と韓国語の表現構造を比較対照し、それぞれの位置づけを行なったものの、その分析方法や用例には幾つかの疑問が残る。

まず、日本語と韓国語の受動表現について論ずる際には、その有無を区別し、考察する必要がある。例えば、他動詞の直接受身は韓国語でも可能であるが、自動詞の間接受動は韓国語では許されず、間接受動の一種である「持ち主の受身」の場合では、韓国語でも一部は表現可能とされている。このような日本語と韓国語の相違を、鷲尾(1997a, 1997b)は、〈表.1〉に示したように、〈関与〉(Inclusion)と〈排除〉(Exclusion)という概念に基づいて分類し、その相違を説明している。

〈表.1〉「関与」(Inclusion)と「排除」(Exclusion)¹⁴⁾

		直接/間接	動詞の他動性	例文			J	K	
関与	A	直接受動	他動詞	NP ₁ -NOM	NP ₂ -BY	(ϕ)	V ₁ -PASS	✓	✓
	B	間接受動	他動詞	NP ₁ -NOM	NP ₂ -BY	NP ₁ -ACC	V ₁ -PASS	✓	✓
排除	C	間接受動	他動詞	NP ₁ -NOM	NP ₂ -BY	NP ₂ -ACC	V ₁ -PASS	被害	*
	D	間接受動	自動詞	NP ₁ -NOM	NP ₂ -BY		V ₁ -PASS	被害	*

異言語間の表現の異同について論ずる際、「表現の有無の問題」と「表現の選択の問題」とを区別することは、対照研究の基本的で欠かせない作業であろう。しかし、金(1999)の「受動・能動表現」についての分析を概観する限り、このような問題を区別してからの考察ではないように思われる¹⁵⁾。また、日本語の「レル、ラレル」には「受身、可能、尊敬、自発」の四つの用法があるが、その中で〈スル〉的表現と〈ナル〉的表現の問題に取り組む際に求められるのは、

(12) a. 私はそう思う。 (池上, 1992: 102)

b. 私にはそう思われる。

(12b) のように¹⁶⁾、〈動作主〉としての特性を希薄化し、自分の意志を超えた何らかのはたらきによって、自然とあることが生じたということを表す「自発」と「受身」の区別であろう¹⁷⁾。これと関連し、板坂(1971: 80-81)は(下線は引用者、傍点は原文のまま)、

なるの論理は、やはり自発と根ざすところが同じであり、自分の思考・感情あるいは決意を何か与えられた自然発生的なもののように扱うわけである。[...] われわれの日常の言葉に、また日常の考え方になるなるの考え方が今もって強いのは否みがたい。[...] なるとかれる(自発)とかの背景にある思想は、まだたえずその主体性を問われる運命にあるのかもしれない。

と述べている。しかし、金(1999)は単に〈動作主〉を〈非動作主〉化することのみを問題にし、両言語の表現構造を分析している。

次に、「自・他動詞の表現」の分析について少し検討してみる。例えば(再掲の場合、形態

素単位と日本語訳は省く)、

(13) a. 영화 벌써 시작됐어. ((10b) 再掲)

yenghwa pelsse sicaktoyesse

b. 영화 벌써 시작했어. ((10b) 再掲)

yenghwa pelsse sicakhaysse

例文 (13) を見てみると、(13a) 「영화 벌써 시작됐어 (yenghwa pelsse sicaktwaysse)」 (直訳：映画、もう開始サレタよ) の「시작되다 (sicak-toyta)」 (開始サレル) は日本語の「始まる」に対応する「自動詞」であり、(13b) 「영화 벌써 시작했어 (yenghwa pelsse sicakhaysse)」 (直訳：映画、もう開始シタよ) の「시작하다 (sicak-hata)」 (開始スル) は日本語の「始める」に対応する「他動詞」であると述べられている。しかし、厳密に言うなら「시작되다 (sicak-toyta)」 (開始サレル) は受動態であり¹⁸⁾、また、「시작하다 (sicak-hata)」 (開始スル) は「을/를 (ul/lul)」格 (Accusative) と「가 (ka)」格 (Nominative) どちらも取る、いわゆる〈両用動詞〉 (double-sided verb) であるといわれている¹⁹⁾。仮に (13b) 格助詞を付与するならば、「을/를 (ul/lul)」格ではなく、「가 (ka)」格であろう。なお、自他の区別を「을/를 (ul/lul)」格の有無に求めるなら²⁰⁾、(13b) の「시작하다 (sicakhata)」は「自動詞」として扱わなければならないのである。金 (1999) が取り上げた「受動態」と「自動詞」とは、確かに〈動作主〉の明示を回避する方法として考えられるが、それに基づいて「スル」的表現と「ナル」的表現とに分類する際にはより厳密な分析が必要であろう。

さらに、取り上げられている例文の適格性についても再考の余地があるように思われる。例えば、「山田は自分より愛する奥さんに長生きされて、幸せだった。」 (p. 35) という表現は文法的に間違っているわけではないが、おそらくこのような表現は日本人なら言わないだろう。

最後に、2.1 節の〈図. 1〉に示した池上の分析と金 (1999) の分析とを照らし合わせて考えてみると、



〈図. 2〉各言語の位置づけの相違

のような見解の食い違いが生ずる。金賢珍の指摘のように、仮に韓国語が「スル」的言語であるならば、韓国語話者の事態の捉え方とそれに基づく言語化は英語話者に近いということに

なるが、これは正しいであろうか。以下では、言語間に見られる事象の段階の相違について触れ、代表的な「ナル」的表現の用例をいくつか取り上げて韓国語と中国語の表現について検討してみる。また、3言語の表現に見られる相違について、〈変化〉を表す事象に主眼を置いて少し考えてみることにしたい。それは、結果的には本稿の目的である日韓中の3言語の位置づけにもつながるであろう。

4. 事象の段階の相違

池上(1983:250-251)は、以下に示した「ホケット」²¹⁾の指摘を引用し、英語では〈場所の変化〉の動詞が〈状態の変化〉ばかりでなく、〈状態〉を表すことすらありうるが、日本語ではそうではないと指摘している(下線は引用者)。

「英語、あるいはおそらく西欧の言語一般においては、ある場所から別の場所への運動を示す動詞は、同時にある対象が恒常的に占めている空間的位置を表わすのにしばしば用いられる」と述べ、中国語ではこのような言い方は翻訳でない限り行なわれないと付け加えている。中国語についてホケットが述べているのと同じことは、日本語についてもあてはまるのではないと思われる。(池上, 1983:251)

しかし、上記のように日本語と中国語の動詞が同様の性格であるならば、既に触れた「ちなみに他の点も含めて、一般的に、中国語は相当英語寄り、韓国語は日本語寄りの言語という印象を受ける」といった池上(2011:32)の記述と若干矛盾しているように思われる。

また、池上(1983)は、日本語と英語の動詞(「運動の動詞」と「行為の動詞」)における「結果の達成」(結果性)の含意の有無に基づいて、次の三つのタイプに分けて、〈到達点〉という概念を用いて説明している。日本語の動詞は「〈到達点指向性〉が弱い(つまり、それが存在しないか、存在しても達成されるとは限らない)のに対し」(p. 269)、英語の動詞は「〈到達点指向性〉が強い(つまり、それが存在し、達成される)」(p. 269)と説明している(文の適格性の判断は、池上(1983)による)。

① どちらの言語の動詞も意図された結果の達成を含意する場合

- a. 彼ヲ招イタケレド、来ナカッタ (池上, 1983:266)
- b. I invited him, but he didn't come.

② どちらかの言語の動詞は結果の達成を含意するが、他方の言語の動詞はそれを含意しない可能性がある場合

- a. 燃ヤシタケレド、燃エナカッタ (池上, 1983:267)

b. *I burned it, but it didn't burn.

③ どちらの言語の動詞も意図された結果の達成を含意しない場合

a. *彼ヲ殺シタケレド、死ナナカッタ

(池上, 1983 : 267)

b. *I killed him, but he didn't die.

以上をより一般化して言えば、動詞は〈事象の段階〉を表しており、〈結果性〉とは動詞の意味が表す事象の段階の一部であるということである。さらに詳しく見てみよう。上記の三つのタイプに韓国語と中国語を当てはめて考えてみると、おそらく韓国語は日本語と同様の適格性の結果が得られるであろう。中国語の適格性については、宮島(1994)と影山(2002)に興味深い記述があり²²⁾、それに基づいて考えてみると、①②③の三つのタイプがすべて可能となる。また、影山(2002)は中国語・日本語・英語の物の見方について、それぞれの「始まり」「途中」「終わり」の局面を重視する言語であると指摘している。以上の考察をまとめると〈表.2〉のようになる。

〈表.2〉言語間の「事象の段階」の相違

	C	J	K	E
①	✓	✓	✓	✓
②	✓	✓	✓	*
③	✓	*	*	*

事態の〈始まり〉

〈途中〉

〈終わり〉

以上の考察により、中国語と英語はそれぞれ〈開始〉と〈終了〉という両極の局面を重視し、日本語と韓国語はそれよりむしろ〈途中の過程〉を重視する言語であると言えよう。また、このような言語間における動詞の捉え方の相違は、宮島(1994:418)の「動詞(言語)は、動作(客観的な世界)を、任意の段階にくぎることができるはずだから、ちょっとみたところでは、おなじようにみえる動詞でも、言語によって、ちがった段階までをふくんでいる」という指摘と相通じるところがあろう。

5. 「スル」的表現と「ナル」的表現

先ず、(14)の例文を見られたい。

(14) a. 春が来た。

b. 春になった。

(14a) は、「春」という個体がこちらへやってきたということが表現されている。一方、(14b) は時が徐々に推移して行って、「春」という季節に入ったという「自然発生的に生じた変化」(自発的变化) が表現されている。両方とも、ごく普通に用いられる表現であろうが、日本語の場合は (14b) の「ナル」的表現が多用され、さらに、「当事者の意志で決定されるはずの行為でさえも、「ナル」的に表現しようとする傾向が見られる」ということは既に多くの人々に指摘されている。例えば、

- (15) a. 服がきれいにになりました。
 b. 卒業論文のテーマが決まりました。
 c. 私達、来週引越すことになりました。
 d. 私達、来月結婚することになりました。

のように、日本語では、主体の自らの意志や具体的な行為などに言及せず、事態の内部に位置付けて、あたかも自然な推移として事態が生じたかのように表現する「ナル」的表現を好む傾向がある²³⁾。このような「ナル」について、池上(1992)は「事態の中で〈個体〉としての〈人間〉が〈動作主〉として如何に自律的に働こうとも、「ナル」はその〈個体〉を事態全体の流れの中に没せしめ、〈個体〉を越えた事態全体の変化として捉える」(p. 104) と述べている。(15) の「ナル」的表現は、韓国語と中国語ではどのように表現されるのかを考えてみると、おそらく次の (16) (17) ように表現することができるであろう。

- (16) a. 옷이 깨끗해졌습니다.
 os-i kkaykkushay-ci-ess-supni-ta
 clothes-NOM clean-become-PAS-HNR-DEC
 b. 졸업논문의 테마가 정해졌습니다.
 colepnonmwun-uy theyma-ka cenghay-ci-ess-supni-ta
 graduation thesis-GEN subject-NOM decide-become-PAS-HNR-DEC
 c. 우리 다음주에 이사하게 되었습니다.
 wuli taum cwu-ey isaka-key toy-ess-supni-ta
 We next week-DAT move-become-PAS-HNR-DEC
 d. 저희들 다음달에 결혼하게 되었습니다.
 cehuy-tul taum tal-ey kyelhonha-key toy-ess-supni-ta
 We-PL next month-DAT marry-become-PAS-HNR-DEC

韓国語の場合は (16) のように、日本語の「なる」に対応する「cita」と「toyta」が用いられて

おり、事態を成り立たせる主体や行為は事態の内部に位置づけられ、自然な推移として生じた事態の変化を享受するような「ナル」的表現で表現されている。このように、実際には主体の自らの意志による行為であっても、それに「*cita*」と「*toyta*」が添えられると、身体性が希薄化され、あたかも自然な成り行きで事態が運んで行ったかのような意味合いになる。

一方、中国語の場合は (17) のように、「服を洗ってきれいにしました」「私がテーマを決めました」「私達、来週引っ越します」「私達、来月結婚します」という意味に近い表現になっているため、「事が自然な成り行きで運んでいった」というようなニュアンスを感じ取ることは難しい。

- (17) a. 衣服洗干净了。

yīfu xǐ gānjìng-le
clothes wash clean-PERF

- b. 我决定了毕业论文的题目。

wǒ juéding-le biyè lùnwén de tímù
I decide-PERF graduation thesis GEN subject

- c. 我们(决定)下星期搬家。

wǒmen juéding xiàxīngqī bānjiā
We decide next week move

- d. 我们(决定)下月结婚。

wǒmen juéding xiàyuè jiéhūn
We decide next month marry

即ち、例えば、(17c) (17d) は英語の ‘We are moving next week’ や ‘We are going to get married next month’ に近い表現であり、主体を際立たせて自らの意志で行為をし新たな事態を得たかのような「スル」的表現で表現されている。以下では、このような「日本語・韓国語」と「中国語」に見られる対称的な性質について、〈変化〉の側面に一步踏み込んでもう少し考えてみることにしたい。

6. 〈変化〉を表す表現の相違

〈変化〉(become) は、「「前」の状態から「後」の状態へ」の推移の有無という形でしか捉えることができない。そのため、「時間の推移」が必要不可欠な要素となるが、結果として生ずる事態に専らその焦点が合わせられる、という特徴をもつ事象である。

日本語の〈変化〉を表す表現には、既に前節で少し触れた「春になった」という〈自発的变化〉に加え、「主体による行為の結果、生ずる変化」を表す〈非自発的变化〉の二つがあると考えられる。

- (18) a. 服が汚れた。
b. 服がきれいになった。

上記の(18a)(18b)は、一見同じ変化を表しているようにも見えるが、(18a)の場合は、〈自発的变化〉と〈非自発的变化〉の二つの変化を表すことが可能であるのに対し、(18b)の場合は、通常主体の意志による何らかの行為があつてはじめて生ずる変化であり、即ち、〈非自発的变化〉しか表せない、という違いが存在することは容易に読み取れよう(以下では、便宜的に〈図.3〉の「A」「B」「B'」「C」の記号を用いる)。

変化	{	A :	自発的变化	—	春になった。
		B :	自発的变化	{	服が(自然に)汚れた。
		B' :	非自発的变化		服が(行為によって)汚れた。
		C :	非自発的变化	—	服が(行為によって)きれいになった。

〈図.3〉変化の表現の分類

このように考えてみると、「ナル」的表現の裏には〈非自発的变化〉を〈自発的变化〉として捉えられるか否か、という事象の捉え方の可否の問題が深く関わっていることが十分に想像できよう。

上記の「A」「B」「B'」「C」を表す用例は、韓国語と中国語とでは、それぞれ(19)と(20)のように表現することができる。

- (19) a. 봄이 되었다.
pom-i toy-ess-ta
spring-NOM become-PAS-DEC
b. 옷이 (自然に) 더러워졌다.
os-i telewe-ci-ess-ta
clothes-NOM dirty-become-PAS-DEC
c. 옷이 (行為によって) 더러워졌다.
os-i telewe-ci-ess-ta
clothes-NOM dirty-become-PAS-DEC
d. 옷이 (行為によって) 깨끗해졌다.
os-i kkaykkushay-ci-ess-ta.
clothes-NOM clean-become-PAS-DEC

- (20) a. 春天了。
chūntiān-le
spring-PERF
- b. 衣服脏了。
yīfu zāng-le
clothes dirty-PERF
- c. 衣服弄脏了。
yīfu nòng-zāng-le
clothes do-dirty-PERF
- d.?? 衣服干净了。
yīfu gānjìng-le
clothes clean-PERF
- e. 衣服洗干净了。 ((17a) 再掲)
yīfu xǐ gānjìng-le

先ず、「A」「B」の場合、(19a) (19b) と (20a) (20b) から分かるように、両言語ともに日本語と同じく「自然にそうなる」という意味が表されている。次に、「B'」「C」の場合、韓国語は、主体の行為を事態の内部に位置づけて自然な推移として表しているのに対し、中国語は (20c) (20e) のように主体の行為を際立たせて表現されており、仮に (20d) のように具体的な行為 (洗 xǐ = 洗う) を明記しないと不自然な表現になる。ならば、このような対称的な性質はどうして生ずるのであろうか。

4節で、3言語の動詞が表す事象の段階について述べたが、それは「スル」的表現と「ナル」的表現の分類にも深い影を落としているように思われる。既に触れた通り、変化は「時間の推移」の中においてのみ存在する事象である。中国語は〈開始〉の局面を重視する言語であるため、時間の推移が組み込まれておらず、「B'」「C」を表そうとする場合は、主体による「行為」とその「結果」の二つの局面に言及し、時間の推移を表さなければならない (そのため「線的順序」の〈類像性〉(iconicity) ²⁴⁾ が非常に高い)。一方、韓国語は〈途中の過程〉を重視するため、主体の行為が事態の内部に〈同化〉(assimilation) し易く、〈非自発的变化〉も〈自発的变化〉として表し得る素質をもっている。また、変化を表す自動詞自体にも時間の推移の意味が含まれており、変化のみを取り出して表現できる、ということが言えるのではないか。

以上の考察を踏まえて3言語について考えてみると、韓国語は日本語のように〈非自発的变化〉の場合でも〈自発的变化〉として捉えられる素質をもともと持っており、主体の行為を希薄化し自然な成り行きで事が運んでいったというふうに表示しようとする、いわば「ナル」的表現への志向が見て取れる。しかし、中国語は〈非自発的变化〉の場合は、主体による「行為」

とその「結果」を言及しなければならず、事態に関与する主体の行為に注目し、それを際立たせるような形で表現しようとする、いわば「スル」的表現への志向が見て取れる。

7. むすび

本稿は、異言語間の表現に見られる〈相対性〉(relativity) を問題にしており、即ち、同一の事態であってもそれをことばで切り取って言語化する際には、言語によって差があり得るという認識に立って、3言語の表現構造を比較対照し考察を進めてきた。今までの議論を簡単にまとめて稿を閉じることとする。

事態に関与する主体を際立たせて表現しようとする〈「スル」的言語〉(DO-language) を一方の極とするならば、もう一方の極は主体を事態の内部に位置付けて表現しようとする〈「ナル」的言語〉(BECOME-language) になろう。池上(1983)は、このような外界に対する人間の二つの表現様式に基づいて「英語は「スル」的な傾向が強い言語、日本語は「ナル」的な傾向が強い言語」と述べ、また、池上(2011)は「事態把握のスタンスは、中国語は英語寄り、韓国語は日本語寄りである」と指摘している。しかし、金(1999)は、日本語との表現構造を比較対照し、韓国語は「スル」的言語であると述べている。両者の見解の相違を確認すべく、英語寄りの中国語を取り入れて日本語の「ナル」的表現を軸とし、韓国語と中国語の表現構造を比較した。また、そこに見られる対称的な性質について、「ナル」のもっとも基本的な意味である〈変化〉にまで一步踏み込んで考察し、韓国語と中国語の位置付けを行なった。

既に触れた通り、「スル」と「ナル」という言語話者の振舞い方の類型は、「絶対的」ではなく「相対的」な傾向であるが、本稿の議論からすると、韓国語は日本語寄りの「ナル」的表現への傾向が強く、中国語は英語寄りの「スル」的表現への傾向が強い、ということが言えるのではないか。

最後にもう一点、石綿・高田(1990: 117)は、世界の種々の言語における諸学者の見解を踏まえて、それぞれの言語を池上(1983)の言う「する」タイプと「なる」タイプに分類しているが、〈表.3〉にそれと本稿の考察により得られた結論とを併せて示し、筆をおくことにしたい。

〈表.3〉言語の分類

	「する」タイプ	「なる」タイプ
石綿(1990)	ドイツ語 フランス語 英語	ホーピ語 アイルランド語 バスク語
池上(1983)	英語	日本語
禹	中国語	韓国語

【謝辞】

本稿の執筆に際し、ご指導いただきました学習院大学の鷲尾龍一教授に心より御礼申し上げます。

参考文献

・本文中で言及した文献を「和文」「韓文」「欧文」に分けて掲げる。

【和文文献】

- 荒川清秀 (1982) 「中国語の語彙」『講座日本語学 12 外国語との対照Ⅲ』明治書院, pp. 62- 84.
- 荒木博之 (1985) 『やまとことばの人類学 日本語から日本人を考える』朝日新聞社.
- 安藤貞雄 (1995) 『英語の論理・日本語の論理』12 版 (初版: 1986), 大修館書店.
- 池上嘉彦 (1983) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』再版 (初版: 1981), 大修館書店.
- 池上嘉彦 (1992) 「表現構造の比較—〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語—」國廣哲彌 (編) 『日英語比較講座 第4巻 発想と表現』6 版 (初版: 1982), 大修館書店, pp. 67- 110.
- 池上嘉彦 (2006) 「〈主観的把握〉とは何か—日本語話者における〈好まれる言い回し〉」『月刊 言語』35-5, pp. 20- 27.
- 池上嘉彦 (2008a) 「『「する」と「なる」の言語学』を振り返って」『國文學解釈と鑑賞』73-1, pp. 88- 92.
- 池上嘉彦 (2008b) 「言語の構造の比較対照から言語の話者の〈好まれる言い回し〉の比較対照へ」『日中言語研究と日本語教育 創刊号』pp. 5- 11.
- 池上嘉彦 (2009) 「〈認知言語学〉から〈日本語らしい日本語〉へむけて」池上嘉彦・守屋三千代 (編) 『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて—』ひつじ書房, pp. 2- 47.
- 池上嘉彦 (2011) 「言語研究のおもしろさ」大津由紀雄 (編) 『ことばのワークショップ—言語を再発見する—』第 I 部, 開拓社, pp. 1- 45.
- 石綿敏雄・高田 誠 (1990) 『対照言語学』おうふう.
- 板坂 元 (1971) 『日本人の論理構造』講談社.
- 影山太郎 (2002) 『ケジメのない日本語』岩波書店.
- 金 賢珍 (1999) 「日本語の『ナル的表現』と韓国語の『スル的表現』の対照考察」韓國外國語大學校大學院 碩士學位論文 (修士論文).
- 國廣哲彌 (1974a) 「人間中心と状況中心—日英語表現構造の比較—」『英語青年』119-11, pp. 688- 690.
- 國廣哲彌 (1974b) 「日英語表現体系の比較」『言語生活』270, pp. 46- 52.
- 國廣哲彌 (1976) 「日・英語の発想と表現」『英語教育』25-10, pp. 6- 8.
- 國廣哲彌 (1992) 「総説」國廣哲彌 (編) 『日英語比較講座 第4巻 発想と表現』6 版 (初版: 1982), 大修館書店, pp. 1- 31.
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店.
- 佐久間鼎 (1941) 『日本語の特質』育英書院.
- 外山滋比古 (1988) 『日本語の個性』17 版 (初版: 1976), 中央公論社.
- 高橋英光 (2013) 「類像性」『認知言語学 基礎から最前線へ』くろしお出版, pp. 129-151.
- 寺村秀夫 (1976) 「『ナル』表現と『スル』表現—日英『態』表現の比較—」(国語シリーズ別冊 4) 『日本語と日本語教育 文字・表現編』国立国語研究所, pp. 49- 68.
- 藤堂明保・相原 茂 (1996) 『新訂 中国語概論』4 版 (初版: 1985), 大修館書店.

- 中澤恒子 (2002) 『『来る』と『行く』の到着するところ』生越直樹 (編) 『シリーズ言語科学4 対照言語学』東京大学出版会, pp. 281-304.
- 中野道雄 (1992) 「発想と表現の比較」國廣哲彌 (編) 『日英語比較講座 第4巻 発想と表現』6版 (初版: 1982), 大修館書店, pp. 33-65.
- 西村義樹 (1998) 「行為者と使役構文」中右 実・西村義樹 (共著) 『構文と事象構造』第II部, 研究社出版, pp. 107-203.
- 朴 貞姫 (2005) 『日朝中3言語の仕組み—空間表現の対照研究—』振学出版.
- 本多 啓 (2013) 『知覚と行為の認知言語学—「私」は自分の外にある—』開拓社.
- 宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』むぎ書房.
- 森重 敏 (1959) 『日本文法通論』風間書房.
- 森田良行 (1981) 『日本語の発想』冬樹社.
- 鷺尾龍一 (1997a) 「他動性とヴォイスの体系」鷺尾龍一・三原健一 (共著) 『ヴォイスとアスペクト』第I部, 研究社出版, pp. 1-106.
- 鷺尾龍一 (1997b) 「比較文法論の試み—ヴォイスの問題を中心に—」『ヴォイスに関する比較言語学的研究』三修社, pp. 1-66.
- 鷺尾龍一 (2005) 「受動表現の類型と起源について」『日本語文法』5-2, pp. 3-20.

[韓文文献]

- ・韓文文献の〈 〉は、韓国語の文献名の日本語訳である。
- 文龍 (1999) 『한국어의 발상・영어의 발상』〈韓国語の発想・英語の発想〉ソウル大学出版文化院.
- 徐正洙 (1996a) 『수정증보판 국어문법』〈修正増補版 国語文法〉ソウル: 漢陽大学校出版院. [徐正洙 (2013) 『국어문법』〈国語文法〉ソウル: 집문당]
- 安平鎬 (2006) 「自動詞, 他動詞 交替現象과 能格性 (Ergativity) 에 대해서」〈自動詞, 他動詞 交替現象と能格性 (Ergativity) について〉『日本語文法』28, pp. 55-72.

[欧文文献]

- Sapir, Edward (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*, Harcourt, Brace and Company, New York. [安藤貞雄 (訳) 『言語—ことばの研究序説』岩波書店、1998]
- Whorf, B. L. (1956) *Language, thought, and reality: Selected writings of Benjamin Lee Whorf*. ED. J. B. Carroll. Cambridge, MA: MIT Press. [有馬道子 (訳) 『言語・思考・実在—完訳: ベンジャミン・リー・ウォーフ論文選集』南雲堂, 1978; 池上嘉彦 (訳) 『言語・思考・現実—ウォーフ言語論選集』弘文堂, 1978; 池上嘉彦 (訳) 『言語・思考・現実』講談社学術文庫, 1993]

[辞書類]

- 荒屋 勸 (1995) 『中国語常用動詞例解辞典』日外アソシエーツ.
- 大阪外国語大学朝鮮語研究室 (1986) 『朝鮮語大辞典 上巻』角川書店.
- 亀井 孝・河野六郎・千野栄一 (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂.
- 『標準国語大辞典』国立国語院 WEB版 http://www.korean.go.kr/09_new/index.jsp

注

- 1) 「いく・くる」と‘go・come’の相違は、久野(1978)・中澤(2002)を参照されたい。
- 2) このような相違は、個別言語を仔細に眺めていくと、同様なことがしばしば確認される。詳しくは、森田(1981)を参照されたい。
- 3) 「スル」的言語と「ナル」的言語という対立は、日英語の「無生物主語」の使役構文をめぐる相違と密接に関連しているとの指摘もあり、詳しくは西村(1998: 157-161)を参照されたい。
- 4) 佐久間(1941: 211)は、日本語は「自然本位的あるいは非人間的」であり、英語・ドイツ語は「人間本位的」であると指摘している。
- 5) 森重(1959: 1)から借用した用語である。
- 6) 朴(2005)による。
- 7) 韓国語用例の表記は、Yale式ローマ字表記法を用いる。なお、各用例に形態素単位を付した。形態素単位は、次のような省略記号を用いる。

略号	形態素単位	略号	形態素単位
ACC	ACCUSATIVE 対格	NOM	NOMINATIVE 主格
DAT	DATIVE 与格	PART	PARTICLE 助詞
DEC	DECLARATIVE 平叙文・平叙文語尾	PAS	PAST TENSE 過去時制
FIP	FINAL PARTICLE 終助詞	PASS	PASSIVE 受動態接辞
FN	FORMAL NOUN 形式名詞	PL	PLURAL 複数
GEN	GENITIVE 属格	PERF	PERFECT 完了
HNR	HONORIFIC 尊敬語	TOP	TOPIC 話題
INST	INSTRUMENTAL 具格		

- 8) Sapir(1921: 21)は‘..., language, as a structure, is on its inner face the mold of thought.’(「言語は、一つの構造として、その内面においては思考の鋳型である」(安藤訳, 1998: 42))と述べており、Sapirの言葉を借りるならば、同じ内容が異なる「鋳型」に流し込まれるということである。
- 9) ちなみに、池上訳(1978: 99)では「言い廻し」、有馬訳(1978: 177)では「話し方」という用語で訳されている。
- 10) 例えば、中野(1992: 52)は、「「発想」とは考え方の展開・脈絡のこと、「表現」とはidiomのこと」と定義されている。
- 11) 例えば、板坂(1971: 80)は「われわれの日常の言葉に、また日常の考え方になるの考え方が今もって強いのは否みがたい」と述べ、また、荒木(1985)は「なる」というのは「自発」「自然展開」の意をもった語であり、「日本人にとっての価値とは、尊敬すべきものとは、ことの「自発」的、「自然展開」的あり方そのものでなければならなかった」(p. 42)と述べている。
- 12) 中国語に関しては、寺村(1976)にも同様の見解が見られる。
- 13) Yale式表記法、形態素単位、日本語訳(直訳)は筆者による。直訳の文に「*・?」などの記号は付しない。
- 14) 〈表・2〉の形態素単位は、次のような省略記号を用いている。

ACC	Accusative (対格)	NOM	Nominative (主格)
BY	受動文における意味上の主語のマーカー	PASS	Passive (受動形態素)

(鷲尾(1997b: viii)「凡例」より)

- 15) 寺村(1976)はこれと関連し、「表現構造は、英語では一般に受身表現のほうがふつうで日本語では自動表現がふつうだ」(p. 66)と述べており、この指摘を踏まえて「受動表現」について考えてみると、「スル」的表現と「ナル」的表現に取り組む際に求められる尺度としてはやはり検討の余

地があろう。

- 16) (12)は韓国語と中国語では、おそらく次のように表現されるであろう。

(12)' a. 저는 그렇게 생각합니다.

ce-nun kulehkey sayngkakha-pni-ta

I-TOP so think-HNR-DEC

b. 저에게는 그렇게 생각되어집니다.

ce-eykey-nun kulehk sayngkak-toye-ci-pni-ta

I-DAT-TOP so think-PASS-become-HNR-DEC

(12)" a. 我是这么想的。

wǒ shì zhème xiǎng de

I be so think PART

b. 我不由地这么想。

wǒ bù yóu de zhème xiǎng

I spontaneously so think

(12b)の「私にはそう思われます」に対応する韓国語の表現は(12)'bであり、直訳すると「私にはそう思われることになります」となり、いわば〈自発の強化〉とも呼ぶような表現で表現されている。一方、中国語は受身を表す「被 bèi, 让 ràng, 叫 jiào」は用いることができず、(12)"bのように副詞「不由地」を用いて「自発」を表すが、直訳すると「私は思わずそう思った」となり、日本語の「自発」の意味を感じ取ることは難しい。なお、一般的には(12)"a「我是这么想的」(直訳：私はそう思った)が用いられる。

- 17) 板坂(1971)は「自発」のラレルについて「自分自身の思考活動の結果として、ある一つの判断に達するのではなく、いつの間にか無意識無自覚のうちにそういう知識に到達した一到達というよりもそういう判断や感じが自然に生じたと言った方が適当であろう—自己をとりまく周囲と自己との区別がなく、周囲に埋没した自己に、あたかも木の葉に結ぶ露のごとくに一つの感じ・考えが発生する。れる、られるというそういう状況下に生まれた感じ・考えであることを示すものである」(p. 72)と説明している。
- 18) 鷲尾(2005: 13)では、韓国語には日本語の受動文に対応する単一の形式は存在せず、日本語が「(ら)れる」形を用いるところで、韓国語は①-i- (-hi-, -li-, -ki-)、②ci-, ③toy-, ④pat-, ⑤tangha-の諸形式を使い分けると述べられている。
- 19) 日本語の場合、自他両用動詞の数はそう多くないが、韓国語の場合は日本語に比べ多数存在すると言われている(安(2006))。
- 20) 韓国語の自動詞と他動詞の区別については、その必要性の是非や区別方法をめぐってさまざまな議論があるが、ここでは深入りはしない。
- 21) Hockett, C. (1954: 117) 'Chinese vs. English: an Exploration of the Whorfian Thesis', in Hoijer, H, ed.: *Language in Culture*, Chicago.
- 22) 宮島(1994: 428)は、中国語の動詞について「動作のしかたを細分するが、結果には関心がうすい、という傾向がある」と指摘している。また、影山(2002: 13-14)は、中国語では、例えば(下線は引用者)、
- ①張三は李四を2回殺したが、李四は死ななかつた。(影山, 2002: 13)
- ②張三は3軒の本屋で(本を)買ったが、買わなかつた。(影山, 2002: 14)
- のような「矛盾表現」が可能であると指摘し、「日本語では「殺したが死ななかつた」とか「買った

が買わなかった」と言うのと、明らかに矛盾しているが、中国語では意味の矛盾は起こらない」(p. 14)と述べている。①に対応する中国語表現は「张三杀了李四两次、李四都没死」(宮島, 1994 : 424)であり、日本語と中国語の「矛盾表現」についてさらに詳しいことは、宮島(1994 : 395-436)を参照されたい。なお、このような例文は辞書にも散見され、『中国語常用動詞例解辞典』からひろった例文をあげておく。

③买了好久了, 都没买到。

④这几个词真难记, 我记了一晚上也没记住。

- 23) 安藤(1995 : 259)は「〈ナル的〉な表現が好まれるということは、その背後に、〈事をスル〉のではなく、〈事がナル〉のをもってよしとする日本人の価値観が潜んでいるということにほかならない」と指摘している。
- 24) 〈類像性〉(iconicity)とは、「言語構造と意味の間の何らかの対応、類似性を指す言葉」であり、それには「量、複雑さ、結束、線的順序、隣接性、繰り返し、社会的距離」の7種がある(高橋, 2013 : 138)。

ENGLISH SUMMARY

Ways of thinking and expression among East Asian languages A Study of 'DO-language' and 'BECOME-language'

WOO, Daeyoung

The purpose of this paper is to look into the issue of “relativity” that is seen among different languages. That is, based on the understanding that the same situation can be verbalized differently among various languages, this paper tries to compare the structure of representation. Comparisons of structural representation have been performed extensively, especially among languages having prominent differences. Ikegami (1983) compared and contrasted the structure of representation between Japanese and English. He concluded that, in Japanese, situations are recognized as entire events, so they are expressed from perspectives, the course of events (*nariyuki*). Thus, he designates Japanese as a “Become-language”. Meanwhile, he designates English as a “Do-language”, in which situations are expressed by placing emphasis on an agent and its actions.

This paper starts from the point of “*suru* (do)” and “*naru* (become)” from Ikegami’s discussion. Then, it explores the positioning of three East Asian languages, Japanese, Korean and Chinese, which are said to have the common ground of understanding the external world.

Key Words : DO-language/ BECOME-language, fashions of speaking, East Asian languages, hierarchy of phenomenon, expressive structure